

V 研究の成果と課題



1 育成する造形的な資質・能力を明確にした指導計画の工夫

○成果

〈教科指導〉

- ・ 技能系統表をもとに、身に付いていない技能や、取り組ませたいことが明確となり、題材計画やスマイルこうぼうの計画に生かすことができた。教師側も学年の課題や、その学年で指導することが明確となったため、大変有効な手段となった。
- ・ プログラミングの手法を取り入れ、「つくり・つくりかえる」過程が可視化されたことで、より効率的な学習をすることができた。

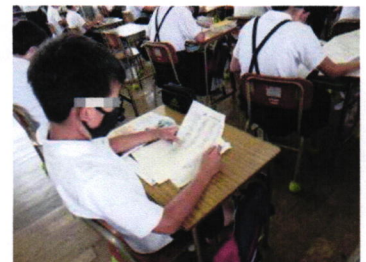


〈教科外指導〉

- ・ コロナという時事に関連した題材を扱うことで、児童が題材のもつ意味や思いを捉え、学習への意欲を保持したまま造形活動に取り組むことができた。
- ・ 授業時間内に設定できない活動・折り紙や塗り絵といった教育課程にない活動も、スマイルこうぼうの時間を確保することで実施し、児童が自然と造形的な資質・能力を高める経験につながった。
- ・ スマイル集会では、共同製作の楽しさや達成感を味わうことができた。個人で作ったものが、1つの作品になったときの驚きや喜びは、さらなる表現意欲を高めることにつながると感じた。

●課題

- ・ 指導計画を立てる際、「技能到達度一覧表」を見て、集団として習得している技能を把握しやすいが、一人一人身に付いている技能は異なる。学級の指標にはなるが、実際の授業では、一人一人の学びをしっかりと見取ることが大切である。
- ・ よく使う水彩絵の具やクレパスといった用具の扱いは、学年間で差がみられた。各学年で扱う材料や用具の基礎的・基本的な正しい使い方を身に付けることが大切であると感じた。
- ・ 表現と鑑賞の一体化を図った授業展開を重ねていくことで、友達の作品のもつよさやおもしろさを感じることができる。普段から身近な作品をみる力を育てていく必要がある。
- ・ 朝の活動における図画工作科のスキルアップは、時間が足りなかったことが多かった。



2 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

○成果

- ・ 児童にとって身近なもの、イメージのわきやすい事柄を題材にすると、主体的な学びがより継続していた。
- ・ 児童が「やってみたい」「何に使うのかイメージがわきそうでわからない」といった、題材へのわ

くわく感がある授業は、児童の表現意欲が高く、題材を通してその意欲が続いていた。

- ・ 自分の表現したいものを見つけるまでの時間が大切であることを実感した。児童の興味関心が継続する題材構成や、児童が「あう」材料や素材、活動場所や環境を工夫したり、友達とのかかわりや自己内対話の時間を確保したりすることが大切であると感じた。
- ・ 製作途中での鑑賞の時間は、有効であった。互いの作品をじっくりと見て、自分の作品に生かすことになった。また、共同製作をすることで、自分のつくりたいものが明確になったり、友達と作品がまとまってよりよい作品になったりするなど、イメージを具現化するために大いに役立った。
- ・ 作品を見る楽しさを体感するには、アートカードを使った活動や、鑑賞領域の授業、普段から作品を見る環境を整備することが大切であった。作品のよさは、画一的なものではないこと、写実的なものが素晴らしいものであるとは限らないということが、児童の中で少しずつ理解できるようになり、友達の作品を認める声が多く聞こえるようになった。
- ・ 保護者をはじめとする様々な人にも作品をみてもらう機会、認められる機会は、児童の新たな表現内容への意欲付けとなり、より主体的な学びが展開されるようになった。
- ・ 題材によって、授業を実施する場所も選択することは有効であった。図工室をはじめ、ダイナミックな活動に必要な廊下や体育館、じっくりと鑑賞を行う広い教室など、校内を有効に使うことも必要な手段であった。
- ・ 「ことばであらわそう」を活用することで、児童の中にストックする言葉が増えた。特にオノマトペによる表現は、児童にとって馴染みやすい言葉になっていた。また、言葉をヒントにイメージを膨らませる表現活動も展開でき、言語活動の充実が、児童の表現活動の幅を広げる一助にもなっていた。



●課題

- ・ 児童が「やってみたい」と思える題材を提示することが、主体的な学びを支える第一歩である。そのためにも教師は事前研修等を行い、題材のもつよさや可能性を知る必要がある。
- ・ 表現は、他の作品も見る経験や、成長段階での児童が積んできた経験一つでどんどん形を変える。題材を扱う前から、児童の造形的な見方や考え方の芽が育っている。それは、材料集めの段階から、児童は「何に使おうか」と材料を楽しみながら収集しているという、授業の前段階での「あひ」を大切にすることにつながっている。完成した作品だけでなく、作品にこめられた思いをしっかりと見取り、感じることも教師には求められている。
- ・ 学びを深めるためには、製作途中の児童の変容も見取ることが大切であった。変容を見取るために、図エファイルやタブレット端末を活用したが、図エファイルに製作途中のものをとどめるのは、ハード面での難しさがあった。

- ・ 教師の言葉は、児童にとってヒントや励ましになる。児童の全ての思いや考えを受け止め、承認することが、新たな表現意欲につながるため、効果的な声かけや机間指導を、今後も研究することが大切である。教師の声かけにより、児童の表現活動に制約がかからぬよう留意したい。

3 表現する喜びの自覚・共有につながる評価の工夫

○成果

- ・ 大型テレビにタブレット端末で撮影した写真や動画を映し出すことが、児童にとって大きな励ましや喜びになった。また、前に映し出した作品は、他の児童にとってのヒントにもなり得る。全体で見ることで、自分ではなかなか気付かないよさを認められる機会にもなる。個別での声かけと全体での賞賛が、児童にとっての表現意欲になった。
- ・ スマイル集会を行うことで、自分の作品への愛着がわいた。廊下に飾られている作品をじっくり見て、自分の作品や友達の作品のよさを認め合う視点が育っていった。
- ・ 自分らしい表現や、友達の表現のよさを認めることのできる児童が増えてきた。表現と鑑賞の活動をバランスよく行うことで、造形的な視点が児童の中で育ってきているように感じる。
- ・ 製作途中に、自分の作品への思いを語ることのできる児童が増えてきた。自分の決めた色や形にこだわって、最後まであきらめずに作品に向き合うことができているので、一つの作品を仕上げた満足感や達成感を多くの児童が感じている様子が見られる。
- ・ 振り返りの時間に、自他の成長やよさを認めることで、新たな表現意欲を高めることにつながった。
- ・ 教師も児童の成長を認めることのできる言葉をさがし、声をかける実践をくり返すことによって、児童の作品への見方が深まり、評価に生かすことができるようになった。



●課題

- ・ 児童の評価をする際には、製作過程の評価規準を教師も明確にもっておく必要がある。
- ・ タブレット端末を使った写真や動画の撮影は、製作途中の様子の記録にもなるので、指導体制を工夫することも大切であると感じた。
- ・ 図工ファイルの効果的な使い方を研究する必要がある。製作過程の記録方法についてさらに研究を重ねる必要がある。
- ・ GIGAスクール時代の到来により、1人1台タブレット端末を活用することができるので、自分の好きなタイミングで、写真を残しておくことも可能となった。図画工作科の授業におけるICT機器の効果的な活用法について、今後検討していきたい。



おわりに

コロナ禍の中、いつも心のどこかで不安がつきまとう日々でした。感染対策を考えながらの授業や研究会。突然の休校。でも研究に携わる中で、表現する喜びを追求する姿勢を大切にする図画工作科の考え方や、子どもの豊かな感性を大切にする「はじめに子どもありき」の理念にふれていると、今、目の前のことを大事にしてコロナウイルス感染症に惑わされることなく子どもたちと向き合おうと、勇気が湧いてきました。

目を輝かせて、集中して、活動している児童の学習時間は、その授業が研究授業であろうとなかろうと大事な一時間です。そんな時間を生み出すために知恵を絞り、題材に思いを込め、場の設定や教具等様々なことに思いを巡らせ授業準備をする教職員たち。図画工作科で培われた授業に対する姿勢や思いは他教科の授業でも活かされていきます。研究が進むにつれて、授業に夢中になっていく教職員や児童の姿が、何よりも愛おしく思いました。そんな機会が与えられたこと、そんな中に加わられたことは今回の研究の醍醐味です。

また、今回の研究は様々な方々に支えて頂きました。開催するにあたり協議を重ねてくださった県小教研役員会や図画工作部会。何度も本校に足を運んでくださった運営委員や助言者の先生方。そして、困った時には快く助けてくださる小松島市小教研の先生方。ハイブリット開催にあたり、ご尽力いただいた方々……。書き切れない程のたくさんの方々に助けていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを研究への新たなパワーに代えて、これからも続けて子どもたちと向き合っていきたいと思います。

児安小学校 教頭 佐藤 道代

研究同人

令和元年度

吉田 速人 石田 早人 秋山 美鈴 森本恵美香 濱田江利子 神崎 素子 川又 佳也
牛田 和哉 吉田 美紀 尾崎 友香 前田 拓志 西東 由美 竹内 文哉 齋藤あゆみ
大西 正文

令和2年度

吉田 速人 佐藤 道代 秋山 美鈴 森本恵美香 立田香江子 川又 佳也 牛田 和哉
佐藤 淑恵 伊勢 大毅 吉田 美紀 尾崎 友香 齋藤あゆみ 株田沙耶香 児島 翔悟
大西 正文

令和3年度

吉田 速人 佐藤 道代 秋山 美鈴 森本恵美香 立田香江子 牛田 和哉 佐藤 淑恵
伊勢 大毅 吉田 美紀 尾崎 友香 廣瀬 志帆 大木 宏美 柴田 直哉 渡川 恭弘
元木 菜緒